



Title	現代中国における医食同源思想とその展開
Author(s)	張, 文碧
Citation	大阪大学, 2008, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/49489">https://hdl.handle.net/11094/49489</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、<a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">大阪大学の博士論文について</a>をご参照ください。

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【9】

氏 名	張 文 碧
博士の専攻分野の名称	博 士（言語文化学）
学 位 記 番 号	第 2 2 3 9 6 号
学 位 授 与 年 月 日	平 成 20 年 6 月 25 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第1項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学 位 論 文 名	現代中国における医食同源思想とその展開
論 文 審 査 委 員	（主査） 教 授 深澤 一幸 （副査） 教 授 北村 卓 准教授 大森 文子

中国の医食同源思想は、伝統医学に基づき、独特の理論体系や特色を備えている。本研究は中国伝統医学の中から、医食同源思想の理解を一層深化させるため、その発展過程及びその応用の実態を、明らかにすることに焦点を置き、これらに関連する史料、医家らの思想、メディア情報等を用いて、社会科学的な視点から分析・考察した。要約すると、以下の通りである。

1. 古代から現代まで、時代別に知名度の高い古典医籍及び各時代の代表的な医家達を思想を分析することによって、医食同源思想の発展過程を明らかにした。

(1) 医食同源思想は、遠古の時代（～B. C. 1066）に芽生え、その後の発展を成し遂げながら、西周の時代（B. C. 1066～B. C. 771）に「食医」の出現により、「食」と「医」とが、初めて結合した。春秋・戦国から漢時代まで（B. C. 770～A. D. 220）、道教の「寡欲」、「無味」、「無為自然」観、儒教の飲食衛生観及び仏教・雑家らの考え方等によって、この思想が開けてきた。また、陰陽五行説として、伝統医学への応用、『黄帝内経』、『傷寒論』、『神農本草経』の完成により、理論の骨格が形成された。現代にも浸透しているこの思想の多くは、既にこの三大古典に現れており、後世の栄養学、食療法の基礎となり、この展開に大きな影響を及ぼした。この時代までは、養生や予防という面よりも、まだ医療としての意識を強く反映していたのが特徴であった。

(2) 魏晉南北朝時代（220～589）では、医食同源思想は仏教、儒教の影響を受けながら、道教医学の流れを汲み取っていた。「養生成仙」を理想とした「煉丹服石」養生法が、一種の風潮として広まったが、これには科学的な裏づけが乏しく、社会的な問題にまで発展した。一方、庶民は常用食物を中心とした簡便な食養・食療により、健康管理、飢饉対策、脾・胃虚弱への治療、「証」に従い、健康を保ってきた。この方法は、基本的には『黄帝内経』の予防医学の考えに沿い、日常かつ実用的になり、発病から治癒・回復・再発予防に至る全過程の養生を重視するまで発展し、医食同源思想は形成期に入りつつあった。

(3) 隋・唐時代（581～907）に至ると、『黄帝内経』を中心に、前人から受け継いだ理論及び治療経験を改革、展開、体系化する等、医食同源思想は実践的にも大きく前進した。この時代、食療の専門書は60余種にのぼり、独立した専門分野・学問体系として確立された。『千金要方』等には、食療・食養は独立した観があり、食物の単味効果の記載も多く、当時既に医家、上層社会のみならず、庶民もこれらの知見を把握していた。具体的には、日常的な単味の食物効能を重んじた上で、食物に関連する薬物も付け加え始め、新たな食療・食養の体系を樹立し、これが薬膳の雛形になった。処方には、粥・羹・湯・菜

肴・浸酒・茶・乳等の形にしたものが多く用いられた。「安不忘危、預防諸病」及び「以食治之、食療不愈、然後命藥」の思想は引継がれ、「以臟補臟」の見解が提唱されるとともに、季節養生、食物調和、飲食管理、疾病の防止・治療、食物宜忌等に関する論議も一層深化し、内容も豊富になった。

(4) 宋・金・元時代（960～1368）に移ると、金元四大家は、古人の成果を継承しつつ、各自の経験・理論を下に、独自の見解を提唱、特色のある流派を形成した。中国伝統医学の発展に連動して、医食同源の養生思想も理論面の深化のみならず、応用の面においても広く普及する等、飛躍的な発展を遂げた。この時代には、医食同源に基づく養生においては、臟腑への保養が最も重視され、これを反映した陰陽を踏まえた調理法も考案された。四季の変化に附随したこの養生論は、前代に引続き内容も豊富になり、使用に当っても簡便で実用的なものが多くなった。また、病気の予防・治療は、食から始めるとの考えが定着・普及した。高齢者の疾病予防や治療に関する理論・方法も、更に進化した。彼らは薬物・食物の性味から、食の宜忌を論述した。この中に示されている体質や証に従う食療の処方は、薬と食の薬膳方式に属し、その治療効能は、複合方剤が単味より勝っているため、一層重用された。食事療法用としては、粥・羹・飯・餅・膾・酒・茶等の形から成り、内容も一段と豊富になった。

(5) 明の時代（1368～1644）となると、伝統医学は、前代と同様に業績を継承し、発展させ、宋と金・元の医学が融合し、次第に系統化・規範化・理論化されてきた。方剂学、本草学は実用性が高く、内容も極めて豊富となり、考証の確実性も高く、専門性・独自性も持って推進し、更なる発展を遂げてきた。簡便で実践向きの養生法が、多く紹介された。実践・経験が一層積み上げられ、従前と同様に常用の食物による養生が強調され、豊富な内容となった。その他に、陰と陽との主従関係を論じた上で、陽の主導作用が強く主張された。温補を重視した上、陰陽調和による養生や補品の使用法が提示され、前人の成果を更に推し進めた。多くの著作は、高齢者の延年養生のあり方を具体的に論じ、その特徴に合わせた臟腑への養生の必要性を説いた。当時の各学説は、臟腑によつての養生が極めて重視され、研究もなお深まり、五臓の養いによって養生の完成に貢献した。飲食衛生、飲食習慣、飲食節制等は、以前より強調され、多くの養生のための薬膳メニューが作り出された。この時代の医食同源思想は、継承・発展を軸に、実践の強化により、ほぼ完成の域に達した。

(6) 清の時代（1636～1912）に下ると、伝統医学は前時代と同様に成果を継承・折衷・統合し、理論的にも臨床的にも整備されたが、新たな展望へと結びつくものは、見当たらなかった。しかしながら、この時期、海外との医学交流が始まり、中西医结合により伝統の

養生思想に西洋の考えを取り入れ、後世の中西医结合による医食同源思想に新たな扉を開いた。伝統医学は、「衛氣營血」と呼ぶ温病弁証の綱領を新たに提示した。脾・胃の気を補う際には、健康増進用の食物・薬物の妄信と過分の禁忌を戒めた。さらに、この間理論・実践両面ともに、以前の学説を踏襲した上で、取捨選択により系統化され、医食同源思想の円熟期を迎えた。

(7) 清以降(1912～)現在まで、医食同源に関する研究は、断層のある近代、変化の激しい現代を、紆余曲折しながら歩んできた。近代中国においては、平和の時期は短く、庶民は安定した食生活を送ることは困難であった。また、「第二次西洋医学伝来期」の到来による近代西洋医学が、中国の全土に普及したため、伝統医学に対する評価・位置づけを一段低く見る向きがあった。このような状況にも拘わらず、多くの医家達は、中西医结合による伝統医学、及び医食同源への研究とその発展に力を尽くしてきたが、目立った成果は得られなかった。清王朝の滅亡後の1914年、北洋軍閥政府は、伝統医学を否定する政策を打ち出したので、伝統医学は衰退の一途を辿り、この状態は人民共和国が成立するまで続いた。その後、政府が主導する機関によって、知識を復活させようとする動きが見られたものの、近代西洋医学との結合を呼びかけた外には、取り上げるほどの成果はなかった。

1958年の大躍進による経済政策の失敗で、極度の飢餓状態の発生等、特にその後の文化大革命の期間中には、この種の研究はブルジョア意識として批判され、すべてが中止に追い込まれた。併せて、出版事業も不毛の時代となり、成果を生み出す機能すら失った。1976年政治運動がやっと終焉に向かい、1978年に至って改革开放政策が打ち出された。80年代以後、新たな研究機関の発足及びシンポジウムの開催等、失われた古代の養生に関する書物・文献の収集・整理・保存等にも力が入れるようになり、研究環境は蘇生期に入った。1990年代に移ってから現在まで、研究は佳境期に入り、影印本を始め急速な電子版の普及により、この環境も整備され、古典医籍等の浸透も一層図られてきた。「中西医结合」にも現在多くの医者が挑んでいる。医食同源思想は、何千年もの悠久の道のりを歩みながら、深遠なものへと体系化され、今日に至るまで、甚大な影響力を持つものへと、発展・形成されてきた。

2. 医食同源に関係した「指導法」及び「食俗諺」(雑誌『大衆医学』のコラムから抽出: 1980～2005、発行1-2/月)を分析することによって、現代中国の医食同源思想の特質及びその文化的な要素が明らかとなった。

(1) 『大衆医学』は、これまで一連の国家政策の規制を受けてきた。指導手段や指導内容は、時の政策によって左右された外、食環境や疾病構造の変化等による社会的変化、社会の豊かさ、国民の生活向上等による経済的要因、労働条件やニーズの多様化等も指導内容に変化をもたらしている。国家政策、社会的変化、経済力、個人事情等が、現代の医食同

源の深化や指導方法にも影響を及ぼしていることが、明らかになった。

(2) 一部に評価が分かれるものの、次の七つの学説、つまり、①陰陽五行説、②四気五味学説、③蔵象帰経学説、④気・血・津液学説、⑤病因学説、⑥食物機能論、⑦酸性・アルカリ性のバランス説は、現代中国での医食同源を支える理論的根拠になっている。また、整体観念による考え、すなわち「食治為先」等の思想は、現在も医食同源の特色である。時代とともに、この応用範囲は広くなり、主に「健康回復」、「健康促進」、「病氣予防」、「病氣治療」、「美容及びダイエット」等の補助手段として、活用されている。

(3) 医食同源理論の構築、特にその特色及び留意点は、主に素朴な経験の積上げのため、科学的な裏づけを必要とするものも見られるが、これらの多くは、現代科学によって、実証もされてきており、現在の中国人にとって、病氣予防や治療への支えとして、活用されている。

3. このように医食同源思想の発展過程及びその応用・活用等の実態が明らかになり、これらの知見に基づいて、医食同源思想の理解に新たなページが開かれた。今後、現代中国の医食同源理論、とりわけその特色をより一層具現化するためには、「新医食同源」思想の下に、現代庶民がいかなる方法で絶えず科学的な知識を取り入れながら、いかに健康管理を行っているか、また、中国医療政策の改革、食の安全問題、疾病構造の変化等が、庶民の食生活にどのような影響をもたらしているか、為政者が政策を立案する際、庶民の健康管理と健康意識をいかに高揚していくのか等が、今後究明されるべき課題である。

#### 論文審査の結果の要旨

本論文は、中国の伝統医学にもとづいて独特の理論体系を備えている医食同源思想につき、その理解をいっそう深化させ、その発展過程および応用の実態を明らかにするために、これらに関連する史料、医家らの思想、メディアの情報などを用いて、社会科学的な視点から分析考察したものである。

本論文の特筆すべき点としては、まず医食同源思想に関する先行研究や文献資料に対する調査が非常に丹念であることがあげられる。つまり、第2章から第4章までの3章にわたって、古代の「黄帝内経」から現代の医食同源思想研究書までの文献を非常に注意深く読んだうえで、その内容を著者なりの視点からよくまとめて解説している。それゆえに中国の医食同源思想の、古代から現代にいたる継承や変化の有様がきわめてわかりやすいものとなっているのである。

また第5章「「大衆医学」における現代中国医食同源の実像」では、大衆医学の紹介雑誌として最も普及している「大衆医学」のコラムの詳細な分析により、医食同源思想が現代

の中国社会にどのように反映しているかを、きわめてわかりやすく説得的に述べている。

そして第6章「食俗諺にみる現代中国の医食同源」は、食に関することわざを非常に丹念に収集した上で分析を加えているが、きわめて興味深く、また第5章での叙述を補強するものとなっている。

またぜひ取り上げておきたいのは、付録資料1「『大衆医学』のコラムから抽出したタイトル」で、1980年1月から2005年12月まで「大衆医学」に掲載された食に関する記事のタイトルをすべてあげており、それ自体が中国社会の25年のわたる変動を如実に反映しているのみならず、今後の研究のヒントにもなっている。

ここで不足点をあげるとすれば、第2章から第4章までの分量が第5・6章に比べて過重でありバランスが悪い、第5章では現在中国の医食同源思想の特徴を考察するというが、実際その思想がどのようにあらわれているのか、また過去とどう違うのか、といった点の考察が足りないなどである。しかしこれは、本論文全体の価値をいささかも損なうものではない。

以上のように、本論文は博士（言語文化学）の学位論文として十分価値あるものと認められる。